

シフト/シェアを使い、タスク軽減をしなければ未来はない！

—人口減の極貧日本でまっとうな医療を提供するためにすべきこと—

◎都築 豊徳¹⁾愛知医科大学 医学部 病理診断学講座¹⁾

道徳なき経済は罪悪であり、経済なき道徳は寝言である。

2010年頃より潜在化していた労働人口の減少であるが、コロナ禍以降に一気にその状況が顕在化し、様々な業種で人手不足の状況にある。医療界もその例外に漏れず、人手不足の状況が益々悪化しているのが現状である。医師を中心とした働き方改革が進められ、医療業務のタスクシフト/シェアが喫緊の課題とされている。本件に関して認識すべき重要な点として、病理関連では医師と病理検査技師との間にかかなりのタスク・シフト/シェアが行われていること、病理検査技師自体がすでに超過勤務状況であること、その労働に対する正当な報酬を受けていなかったことを十分認識する必要がある。本件は国を挙げての事業であるが、実はやりがい搾取とも言える業務実態を無視した内容であることに中止しなければならない。一方産業界に目を転じると様々な業種で同様な問題点が噴出しているのが現状で、それに対応すべく賃金を含めた待遇改善が急速に進行し、対応出来ない部門では深刻な人手不足問題が生じている。医療界は倒産の危機が少ないという神話が長らく信じられてきていること、医療自体が“聖職”であるという特別視がされてきたことから、低賃金労働環境が形成されていたと言っても過言ではない。現在の高校生以下の世代が上記の実態に気付いた場合（現役世代も含まれるかもしれない）、急速な医療職離れによる人員体系の崩壊の可能性があるとも言える。

解決策の一つとして様々な産業でデジタル化の推進が叫ばれ、国を挙げての推進事業とされている。全ての領域でデジタル化による優越性が示されている論調で事業が進められる傾向が強いのが現状であろう。医療においてはその傾向が顕著であり、デジタル化が進んでいない後進領域の代表例として医療が俎上に挙げられることは少なくない。その一方で、デジタル化が困難な状況が存在する領域が存在しているのも事実である。世間的にはその現状理解が乏しいことが、医療当事者との大きな軋轢を生じる原因となっている。デジタル化には高額な費用が必要であり、その実行には経済的な裏付けが必要である。真の意味での医療予算が縮小を続ける現状において、これらの予算を獲得するのは容易ではない。その一方でデジタル化は必ずしも全ての医療分野に恩恵をもたらしていないことには再考する必要がある。個人が描くデジタル化に対する全体のイメージにはあまりにも開きがあり、正確な未来図が描けていないのが現状であろう。

今回のシンポジウムでは、医師と病理検査技師とがシフト/シェアを使い、タスク軽減に向けた全体像を考える機会を設けたいと考えている。同時に医療系、特に病理のデジタル化の光と影についての話題を挙げて討議する機会を設けたいと考えている。デジタル化により病理診断の効率化が推進されることは確かであるが、その一方で病理医一人当たりの労働環境が悪化する懸念を十分に検討する必要がある。デジタル化により医療従事者間の連携が高まりと業務の効率化の可能性が常に取り上げられてきたが、実際には連携が薄れ、負の意味での効率化が進んでいるところも少なくない。少ない医療資源で、医療従事者並びに患者が恩恵を受けられる方法を検討できる機会を作りたいと考えている。